そう小さく呟いて、ほくそ笑む。
「ツナはおっぱい揉まれるより、乳首弄られる方が好きなんだな」
「えっ？　あ、ぅんっ！　ひぁ……ァあん！」
突起を扱くように刺激されると、バストへの愛撫にゆったりとしていた体がまた跳ね始める。
過剰なまでに反応してしまうのが恥ずかしかったが、体が自分のものではなくなったみたいでどうすることも出来なかった。
「こっち、いっぱい弄ってやるよ」
ディーノはそう言いながら吊り上げた唇の端をペロッと舐めると、震える突起の片方に食らいついてきた。
「ひぁぁっ！　や、噛んじゃダメぇっ！」
甘噛みされ、背筋に突き抜けるような感覚を覚えながら必死に叫ぶ。
しかし突起に立てられた歯は弱まるどころか徐々に強くなっていく。
食い千切られたらどうしよう。
一瞬そんな不安が湧き立つが、甘い痛みが本格的な痛みに変わる前にディーノの顔が胸から離れた。
「う……ディ……ノ、さん……痛いのヤダぁ……」
「ゴメンゴメン、今度は優しくペロペロしてやるよ」
「へっ？　あ、ちょ、待っ……ぁぁぁぁぁんっ!!」
悪戯っぽい顔が何かを企んでいるようで、焦って制止の声を上げるが、それは途中で嬌声に変えられてしまった。
「ンッ……ハァ……」
「や、やァっ！　あ、は、ァああぁっ!!」
ディーノの舌先が、触れるか触れないかのソフトなタッチで突起を撫で擦る。
擽ったいような気持ちいいような何とも言えない感覚に身が捩れ、はしたない声が何度も口から漏れた。
歯によるちょっと痛めの愛撫と、絶妙な舌のソフトタッチ。
そして縦横無尽に捏ねくり回してくる指。
気が遠くなる程繰り返される突起への責めに、まだ一度も触れられていない場所まで妙な感覚を覚え始め、内股が無意識に擦られる。
それに目敏く気付いたディーノは突起への愛撫はそのままに、そぅっと片方の手をそこに滑り込ませた。